

どんな病気なの？ パーキンソン病

「パーキンソン病」の原因

中脳の黒質にあるドパミン神経細胞が減少し、ドパミンが不足することで体の動きに障害が起こる病気を「パーキンソン病」といいます。

姿勢が不安定になり
転びやすくなる

動作がゆっくりになる

ドパミンが不足すると...

筋肉がこわばる

手足のふるえ

発症するのは
50歳以上が多く
65歳以上が
約**90%**

パーキンソン病は、高齢になるほど
頻度が増加しています。
さらには高齢化に伴い患者数も増加し、
アルツハイマー型認知症に次いで
頻度の高い神経変性疾患です。

頻度は人口10万人あたり
100~180人
65歳以上になると
100人に**1**人

パーキンソン病は決して珍しい病気ではありません。

POINT

5

できるだけ
運動をしましょう!

散歩や音楽に合わせてリズム運動などは、動作の維持や転倒防止予防などに役立ちます。

POINT

1

しっかりとした
服薬を!

パーキンソン病の治療は薬物療法が中心です。運動症状などの困った症状を、薬を使って上手にコントロール。

POINT

4

食べる力を維持する!

食べる楽しみは生活を豊かにします。誤嚥性肺炎を予防し、自分の口から食べ続けるために、できるだけ取り組みをしていきましょう。

症状の進行を加速させない
ために**日常生活で
大切なこと!!**

POINT

2

人との交流、
社会参加を心がける!

外部の人々との交流を通じて楽しみを共有し、ストレスを軽減しましょう。また、ご家族やご友人との定期的な食事や会話を楽しむことも大切です。これによって、心の健康を保つことができます。

POINT

3

食物繊維と水分補給
をとみましょう!

パーキンソン病では便秘になりやすいため、食事に「食物繊維が豊富な食べ物」を取り入れることがおすすめです。また、水分補給も大切です。水を飲むことで、便秘の予防につながります。

パーキンソン病と長く付き合っていくには

症状や経過は個人差が大きく多彩な症状を来します。一見パーキンソン病とは関係なさそうに思われる症状でも気になる症状が続く場合は、早めに医療機関を受診し、専門医に相談しましょう。パーキンソン病は進行性で長く付き合っていくためにはなりません。ゆっくりと進行し、様々な症状をきたすため、多職種による連携体制を整えていくことが重要であり、家族の理解や協力のもと患者さんをサポートして頂くことが大切です。



ドパミンは 脳と体の橋渡し役

ドパミンは、脳の中で作られる神経伝達物質のひとつです。体をスムーズに動かすための「指令の橋渡し役」をしています。



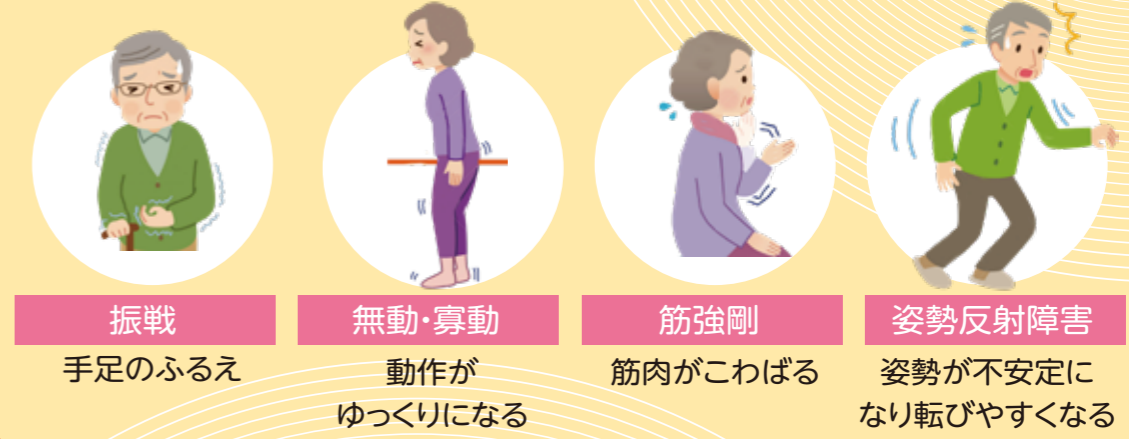
パーキンソン病にはどんな症状があるの？

初期症状



体の片側から始まることが多く、徐々に反対側にも及んでいきます。

運動症状



非運動症状

- 精神症状
 - 感覚障害
 - 睡眠障害
 - 自律神経障害として気分の落ち込みや不安感
 - 幻覚
 - 認知機能低下
 - 嗅覚の低下
 - 腰痛や四肢の疼痛
 - 不眠
 - 睡眠中に大声を出したり体を動かしたりする
 - 便秘など…
- 多彩な症状をきたします。また、非運動症状は運動症状よりも先に現れる場合もあります。

進化しているパーキンソン病の治療法

治療の中心は、脳内のドパミンの不足を補う薬物療法です。

医師の指示通り決まった時間に薬を飲むことで、脳内のドパミン濃度を安定させ、症状を軽く保つことができます。患者さんの年齢や症状、生活状況に応じて薬の種類や量、時間を調整していきます。

きめ細かい治療が可能です。

近年は治療薬の種類が増え、副作用に配慮しながらきめ細かい治療が可能になっているとともに、早期からのリハビリテーションも推奨されています。進行した場合には、専門医のもとで、脳深部刺激療法などの外科的治療が検討されることもあります。非運動症状に対しても薬物療法や生活指導などをおこないます。このようにパーキンソン病の治療は複雑かつ多彩であり、専門医だけでなく、かかりつけ医、訪問看護、訪問および通所リハビリ、ケアマネージャーやヘルパーなど多職種による連携が重要となります。

パーキンソン病の発症後

パーキンソン病患者の経過は？

治療法の進歩により、現在ではパーキンソン病患者さんの平均寿命は一般の方と大きく変わらないと考えられています。

ただし、転倒による骨折や誤嚥(ごえん)性肺炎などをきっかけに、体力が低下し、寝たきりの状態になることもあり、こうした合併症が重なることで命に関わる場合もあります。そのため、転倒予防や嚥下機能の維持などに注意しながら、体の機能をできるだけ保っていくことが大切です。

